四　タウン情報誌の会社にて

「昨日は遅くなったのか」先輩の宮崎が坂本の机の横に立った。
「ええ。それほどでも」
「あのお得意さん、結構、しつこいからな。なんでも、はいはいと聞くんじゃなくて、適当にあしらっておけよ。そうしないと、夜中までつきあわされるぞ」と忠告してくれる。
「はあ、ありがとうございます」坂本は、先輩の言う通りに適当に返事をする。本当は、落武者の宮本に出会って、会社に帰れなくなっただけだ。だけど、宮崎に宮本のことは話せない。話しても信じてくれないだろうし、宮本もそんなことは希望していないはずだ。
　昨日ひと晩、宮本と一緒にいたが、身なりは落武者だけど悪い人のように思えない。一人暮らしの坂本にとっては、今は、唯一の知り合いだ。友人になれそうな気がする。これからどうなるかはわからないけれど、当分は、二人、いや一人と一石で、生活をしてもいいと思っていた。
「坂本君。ちょっと来て」竹内編集長だ。
「はい」坂本が大きく返事をした。狭い事務所の中に坂本の声だけが響く。
「君。返事だけは社長だね」編集長が椅子に座った。他のスタッフが口に手を当てて笑う。
「はい」宮本はめげずに大きな声で返事をする。それが、宮本の真骨頂だ。
「返事はいいから、何かいい案を出してよ」
　坂本が勤めている会社はタウン情報誌を出版している。だが、それだけではなかなか収益の増加につながらない。そこで、新たな企画を出して、収益の柱にしようと考えている。だけど、何をしてもいいからという訳ではない。本業はタウン情報誌の出版だ。地域に密着し、かつ、貢献しないといけない。儲かるからと言って、イメージダウンになるような変な事業をする訳にはいかない。
「最近。タウン誌の売り上げが伸びないんだよね。雑誌の売り上げにつながるような、イベントや企画を出してよ」
　うーん。スタッフ全員が、と言っても、編集長の竹内、副編集長の木村、先輩の宮崎、アルバイトのまおかちゃん、そして、坂本の五人だけだが。編集長は目を閉じ、木村は窓の外を見つめ、鈴木は両あごに手を当て、まおかちゃんは首を横に傾け、坂本は頭を掻く。なくて七癖。いや、五癖だ。それぞれが思い思いの癖で、案を考えている。だけど、誰もしゃべらない。沈黙が続く。会議は踊らず、ただ、沈黙が続くだけ。だが、沈黙も長い時間が過ぎるにつれて、金から銀、銅、アルミホイル、サランラップへと変わっていく。
「あのお」まおかちゃんが声を上げた。
「何、何」みんなの目がまおかちゃんに集中する。自分にアイデアがないだけに、他人にアイデアを期待しているのだ。期待しすぎているのだ。
「おトイレに行ってもいいですか」まおかちゃんの発言に、椅子を遊園地のコーヒーカップのように回転させたり、電話の受話器を跳ね飛ばしたり、書類を放り投げたり、床に滑り落ちたりする四人。わざとらしい関西の笑いだ。だが、これも、緊張した雰囲気を和らげるためのアイデアの一つなのだ。

「さっさと行きなさいよ。アイデアは出してもいいけれど、おしっこは漏らさないでよ」
　回転していた椅子を止め、編集長の竹内が再び、目をつぶった。この沈黙ゲームはいつまで続くのだろうか。誰が終止符を打つのか。坂本はあまりにも考え過ぎたので、手に汗をかきだした。その汗がポケットの中の石にも伝わる。知らないうちに、石が少し柔らかく、かつ膨張しだした。
「や、やばい」坂本は前かがみになって、ポケットを押さえた。
「どうしたの。お腹でも痛いの」坂本のしぐさに、編集長はどいつもこいつも真剣に考えていないのだと怒りさえ感じる。
「すいません。ちょ、ちょっと、ト、トイレへ」
　編集長の期待通りに、坂本は編集室を出た。先に出たはずのまおかちゃんに出会うかと思っていたが、廊下にはいなかった。きっと、この事務所の緊張感から解放されたいために、近くのコンビニでも行ったんだろう。坂本にとっては、その方が都合がいい。
　ここは、雑居ビルなので、トイレは共同になっている。坂本は男子便所の大の個室駆け込んで、ポケットから石を取りだそうとした。石はこぶし大の大きさに膨らんでいて、なかなか引っ張り出せない。やっとのことで掴み出すと、急にスイカの大きさまでに膨らんだ。だ。このままだと、もうすぐ、人間に戻りそうだ。と、思う間もなく、石は宮本になった。ただし、宮本は通常の身長よりも、十分分の一程度だ。これなら、大の個室でも二人でも狭くはない。
「や、やばいよ。こんなところで、人間に戻って」それでもあせる坂本。
「いや、別に大きくなりたかったわけではござらぬ。坂本殿の手のひらから出された汗のせいで、大きくなったのでござる」
　宮本はすまなそうに頭を下げた。
「ご、ごめん。つい、会議で考え込んでいたものだから、石を、いや、宮本さんを強く握り過ぎてしまったんです。宮本さんが悪い訳じゃないんですよ。頭を上げてください」坂本もすまなそうに俯く。
「どうしたら、元に戻るの」
「今回は汗程度の水分なので、すぐに戻ると思うでござる」
「へえ。水分の量で、体の大きさが変わるんだね」
「そうでござる。それよりも、新たな企画でござるが」
「えっ、宮本さんも話を聞いていたの？石の状態でも話が聞けるの？」
「もちろんでござる。石になっていても、生きているので意識はあるのでござる。だから、人の話は聞くことはできるのでござる。ただし、残念ながら、しゃべることはできないでござる」
「そうなんだ。石になっても、意志はあるんだ。耳は聞こえるんだ。耳まで石になっていないんだ」坂本は妙に納得した。
「それは、洒落でござるか」宮本が真面目な顔をして聞き返す。
「いや、いや、洒落じゃないよ。でも、会社で大きくなると困るんだよ」坂本は宮本の顔の前で手を合わす。
「わかったでござる。宮本殿には迷惑をかけられないでござる。もうすぐに、石になるで・・・

」としゃべりながら、宮本は自分の体をタオルのようにねじる。汗でなく水分が体から滲み出る。それと共に、宮本の体は小さくなると元の石の姿に戻った。

　便器の蓋の上に、三段重ねの石がぽつねんと残った。坂本は石を手で掴もうとしたが、思い返し、ポケットからハンカチを取り出して、石をやさしく包むと、今度はあまり手の触れない、背広のポケットの中に入れ、トイレの外に出た。そこには、先輩の宮崎が小便器の前に立っていた。

「誰かと話をしていたのか。声が聞こえたみたいだけど」鈴木は体を二、三回振る。だが、社会の窓は開いたままだ。坂本はそれを口にしようと思ったけれど、宮崎先輩が自分と同じようにいいアイデアが浮かばないから、少しでも社会と繋がっていたいのでそのままにしているのかと思い直し、指摘するのはやめた。

「いいえ。ひとり言です。いいアイデアが浮かばないので、考えていたんです」

「そうか。俺もなんだ。トイレに来たら少しでもいい考えが浮かぶかと思ったけれど、同じだな。仕方がない。さあ、会議に戻ろう。編集長が待っているぞ」

　宮崎先輩は社会の窓から社会の冷たい風にさらされていた。

「どう？いいでしょう」

　編集長が提案したのは、婚活パーティーだった。タウン誌の読者は若者が多い。これまでも、デートスポットやデートの際の美味しい料理店の紹介をしてきた。ただ、最近は、結婚する男女が少なくなっている。より一層、タウン誌に関心を持ってもらうためにも、婚活パーティーを開催すれば、タウン誌の購読にもつながるんじゃないかと考えたのだ。

「世の中の動きを変えたいのよ。世の中をぐるぐる回したいのよ。洗濯したいのよ」編集長が力を込めて訴える。

「世の中を洗濯する、ですか。うーん。いいフレーズじゃないですか。みんな、出会いを求めているのに、自らは動かずにじっとしているだけですから。うちが婚活パーティーを主催すればインパクトはありますよ」副編集長の木村がよいしょをする。

「問題は人が集まるかどうかですね」

「それは、実際にカップルができるかどうかにかかっていますよ。カップルが出来れば、口コミでパーティーのよさがわかってもらえますからねえ」

「ただ、友達だけの関係を求めている人もいるんじゃないですか」

「でも、最終的には結婚じゃないですか。結婚につながれば、わたしたちのお得意さんの結婚式場からの広告も入るし、新婚旅行に行くことになれば、旅行会社からの広告も入りますよ」

「そうだよ。二人で住むとなれば、マンションやアパートの情報が欲しいし、家具や電化製品だって購入するよ」

「子どもが生まれれば、ベビー用品も購入するし、家族向けの車に買い替えるかもしれないですね」

「ほんとう、結婚って。大変。あたし、そんなお金ないわ」

「うちの会社、仕事の量や時間の割に安月給だから」

今まで、部下の話しに頭を大きく振って頷いていた編集長だが、最後の言葉に顔がこわばり、発言者の顔を睨みつけた。編集室の雰囲気が一瞬凍った。
その氷を溶かそうと腰ぎんちゃくの副編集が
「結婚は、編集長の考えているとおり総合産業なんですよ。金を生みだす大木なんですよ」とすかさずフォローする。だが、そんなおべんちゃらに対して、現実に根ざしたスタッフたちは
「出そうにも、そんなお金はないわ」
「でも、銀行が結婚でお金を貸してくれるかも」
「住宅ローンじゃなくて、結婚ローン？」
「銀行も広告主になってくれるかも」
「これに取り組めば、タウン誌の未来も明るいぞ」
「そう、上手にいくかしら」
「いくかしらの疑問形じゃなく、上手にいかすために何をするかだよ。ポイントは、いかにして人を集めるかだ」
「出会い率が、結婚率が高ければ、口コミで人が自然に集まってくるわ」
「課題はそこだ。でも、集まった人の質によるからなあ」
「でも、私たちにも何らかのできることがあるはずだ」
「それは何？」
「うーん」
と、話を展開させるものの、また、元の課題に戻った。会議は輪廻転生ように回り続ける。そこで踊る人はいつか目を回して倒れる未来が待っている。
「今、ここでいくら考えても同じね。水入りよ。みんな、家に帰って考えてきて。ついでに、頭の中も洗濯してきて。しかも、漂白してきてよ。明日、真っ白な頭で、また、話し会いましょう！」
編集長が洗濯し過ぎて疲れ切った顔で席を立った。一挙に顔が十歳は老けているように見える。これならいくら漂白しても元に戻らないように思えた。残されたスタッフたちは「うーん」と唸り続け、編集長と同じように自分の誕生日を十回繰り返した。